



◆ I
季節を
いとおしむ言葉

美しい日本語 荷風

永井荷風
持田叙子・高柳克弘〔編著〕

美しい日本語
荷風
I
季節をいとおしむ言葉
目次

第一部 荷風 散文・詩より

持田叙子 5

季節と生きる 6

春から夏へ

いちごの実 8

春のおとずれ 16

賞心楽事 21

牡丹の客 23

美味 32

来青花 36

うぐいす 40

十六七のころ 47

長髪 53

夏の海 59

六月の夜の夢 65

ローン河のほとり 71

夏の町 76

海洋の旅

夕立

西瓜

秋から冬へ

九月の果樹園

葡萄棚

つくりばなし

十九の秋

夜歸る

落葉

冬至

矢はずぐさ

狐

日本の庭

井戸の水

冬の夜がたり

雪のやどり

173 165 158 149 142 137 133 127 122 116 110 105 100

93 90 83

第二部

雪の日
雪解

荷風

*

俳句より

190 180

高柳克弘

201

第一部

荷風
散文・詩より

持田叙子

季節と生きる

永井荷風は人生という時間を、人と生きるのとはそう上手ではなかった。人と深くなれ合うのを恐れ、嫌った。もちろん人を愛し、親しんだ。しかし長くは持たない。そういうつきあい方だった。別れも多かった。彼の人生に最初から最後までういういしく連れ添ったのは、季節である。彼を裏切らない最もいとしい存在は季節だった。

荷風文学の中心には、季節への想いがゆたかに息づく。梅のはな、うぐいすの初音、若緑、虫の声。季節の色や光、音がその文章をあざやかに染める。

太古からこの列島には、和歌や俳句などの季節文芸がゆたかに花ひらいた。ところが日本近代はその伝統を軽んじた。小説や随筆も季節感を古いものとして捨てた。

そこへ立ったのが荷風である。欧米へ早く渡り、逆に日本の季節の特徴に開眼した。四季の雨や風や草花をこそ主人公にしたいと願った。

醜い人間の世とはべつに月はいつも光りかがやく、花は変わらさず薫る——戦争の世紀に生きた荷風の感慨である。季節美への思いが、平和への祈りにつながる。

晩年の荷風を市川の家を訪問したドナルド・キーン氏は、荷風の話す日本語のあまりの美しさに感動した。荷風の言葉は、「私がかつて聴いたことがないくらい美しかった」「忘れようにも忘れられない」と嘆賞した（「声の残り 私の文壇交遊録」）。

その言葉を優しく、母のように気長に磨いたのは季節である。ここに、日本の季節に育てられた最高の日本語がある。どうぞゆつくり楽しんでください。

春から夏へ

いちごの実

明治三十四年、一九〇一年八月、「文芸倶楽部」に発表された短篇小説の全文をおさめる。

自分は何か美しいものを眼にしたいと思うて、夕暮に小川を越した町端れを目差して、ぶらぶらと歩いた。まだ夏の初め、梅雨の入るにも間のある頃なのを、殊の外に暑い日であったので、町の者は皆俄に白い浴衣を着た。自分も荒い飛白の浴衣に椽の広い夏帽子を冠って、まず小さな板橋を渡る。ここはもう町からは半里ばかり離れているので。

一間程しか無い小流があるが、水の奇麗な事といったら、水底の細密い砂利の数も数えられる程で、岸边に生えた露草が踏ったなり、その紫色の可愛らしい花卉を行く水に洗わしている。橋を渡ると、水柳が二三本遠くから見たら、まるで大きな噴水の様、細い長い枝を糸の如く垂らしている。その木蔭の所に、堤を切開いて小さな関の様なものが出ていて、それから清い水晶の様な水が、音も立てずに小川の中へ落込んでいたが、自分はふと足を止めるともなしに眺遣ると、やがて笹の葉で拵えた舟が流れて来て、続いて、椿、薔薇の様な赤い大きな花卉が三片四片ゆらゆら揺られながら、笹舟の後を後掛けて来た。

自分は何ともなしに、急にこの落水の源が尋ねて見たくなくなった、胸の中にはもう種々な想像が

起るので、流の源にはたしかに美しい人がいるに違いない、林檎の様な可愛らしい顔をした子供が——或は許嫁の幼同志かも知れない、互に楽しく長い半日を飯戯に遊暮していたのが、水に映る黄昏の星の光を見受けて、驚いて飯戯に使った種々の花弁木葉舟などを水へ流したなり、優しい母様の膝下へ夕飯を食べに帰ったのであろう、などと、こんな事を考えて、自分は足をその方に向けた。

水柳から三四間離れた所にはもう高い竹垣が囲らしてあつて、その間の狭い空地の間を、稍もすれば生茂る草の中に見失いそうに、彼方此方と屈り曲つて、落水の行手は到頭この垣根の中へ這入っている、自分は垣根に添うた裏手の細道の方へ這入り込んで行くと、片側は広い桑畑で、片側の垣根は細く建連ねて建仁寺、加之に中側には一面に扇骨の木が繁っている、なかなか中の様子を覗見る事は出来ない。

やがて、僅な隙間を見付出したので一生懸命に顔を押し付けて見たが、もう生憎に四辺は、全く暮れはてて、水よりも淡い新月の光は、只自分の着ている浴衣の白さのみを目立たしめるのみ。

失望して、自分は悄然もと来た方へ戻ろうと、洋杖を持直すと、折からの涼しい風、浴衣の袖が飄々と動くと共に、いわれぬ花の匂が、何処ともなしに漂つて来た。自分は忽ちその匂に酔わされでもした様に、ぶらぶらとそのままこの細い裏道を構わず歩いて行くと、間もなく竹垣は尽きてしまつて、果せるかな、荒い粗末な、竹や棒片を建廻らした構中に、芥子と百合の花が一面に咲乱れている花園の裏手へ出た。

自分はあたかも深山みやまの中の、恋人の隠家をでも捜し得た様な、いうにいわれない嬉しい気がして、恍惚うつとりと垣根の外へ、さもその中に這入りたそうな顔付で、もう地面から生えたもののように佇んでしまった。

すぐ垣根際には名も分らぬ西洋の瘦せた草花が、まばらにひよろひよろ立っているが、中は怠りなく、耕されて白百合と芥子とを幾側いくかわにも規則正しく植付けた花畑と、美しい実を結んだ草苺の畑との二つに区別されてある。そして花畑と苺畑との境に細い歩く丈だけの道がついていて、そこには一脚雨きやくに曝さららされたなりの腰掛がある。見ると、一人の爺さんが煙管を啣くわえて腰を掛けていた。

極く力のない弱い月光つきかげを浴びている、爺さんの顔付から凡すべての様子——大きな雁首がんくびの煙管を口へ啣くわえたなり、吹殻すいがらをはたこうともせず、腕組うでぐみをした儘で、白い百合の花を脊せにしながら、慍ごうじつとすくんだ様に顔を前へ突出すいしゅつしている塩梅あんばい、よく油画あぶらえなぞで見る恰好ごうごうその儘である。自分は甚ひどくその様子が気に入ってしまつて、何どうやらその爺さんと話をして見たい様な気もして来た。で、自分は猶なほ頻しきりと憶面おぼしきりもなく覗のぞ込んでみると、やがて白百合と赤い芥子の花の間から、静しずかな草履くわの音がして、十二三の娘が片手に大きな箆ざるを持って出て来て、

『お爺さん、お前も手伝つておくれよ。』といった。

この時爺さんは初めて、煙管を口から放したので、

『お米よねや、先まお前一つ塩梅あんばいを見て見るが可ええ、もう大概おおかた熟まつてはいるだろうがのう。』
娘は畑の中へ屈かんで、苺の赤く熟まつた奴を一つ摘つみ取とつて、爺さんの口の端はたへ差さ付つけると、爺さ

んは懶もつろそうに首を差出して、娘の手から直すに赤い実の汁を啜すつたが、吃驚びっくりりする様な大きな舌打をして、

『もうよく熟うつた事じゃ。お米や、この花畑はなは私わしが鋤くわで丹精たんせいして私わしがお酒さけの代かわりにするのじゃ。此方こつちの苺いちごはお主ぬしが腕うででこの様に見事にしたのじゃから、明日は早速町へ売って、何でもお主ぬしの好きな紅べになと白粉わしろなと買かうて来るが可ええぞ。』

本卦ほんけ返かえりをした爺おやさんが衰おとろえ瘦すせた鋤くわの力は、大方孫まごと覺おぼしい娘むすめが優かよしい繊弱せんじやくい鋤すきの力とは、寔まことに能あたい釣つ合あいであろう、神かみの様ような仏ぶつの様ようなこの二人ふたりが共とも々にこの美しい静しずな裏畑うらに、爺おやさんが耕かした花畑はなの花は花売はなうりの手から、爺おやさんの晩酌ばんしやくのお酒さけになり、娘むすめが耕かした苺畑いちごの苺いちごは八百屋やっしやの手から、娘むすめがお盆おんの時ときのお化粧料けしょうりょうとなるのか、などと思合おもあわせると自分おれはいうにいわれない美しい平和へいわな心地好こころよい感じかんじに打うたれるのであった。

娘むすめは頻しきりと苺いちごの実みを摘とみながら、段々だんだんに垣根かき際ぎへと歩いて来て、大分摘とみ勞くたれたらしい様子ようすで、屈まんだ身体からだを躍然ひつくり起たして、見るともなしに垣外かきを見みると、丁度ちやうどそこには自分おれが余念よねんなく見惚まどれているので、娘むすめは不審ふしんそうに見向むかいた。が、それは決して彼かの西瓜畑すいかの番人ばんにんがする様な、鋭えいい賤せんしい疑念うたがの光ひかりに満みちた眼付まなづではなく爺おやさんの顔かほを見みた時ときと同じ様な罪つみのない愛あいらしい眼付まなづで、やがて又俯仰うづつむいて苺いちごを摘とみ始めたのである。

『ねえさん、私わしにその苺いちごの実みと、お爺おやさんの白百合しらばくを少しばかり売うってくれまいか。』

自分おれはこういつて垣根かきの上うへへ顔かほを差出さした。

娘むすめは再び身みを起たしたが、甚はなだ満み足たりらしく顔かほ付づいて、

『お爺さんお爺さん。あのお方が白い百合の花が欲しいと仰有るから早く切ってお上げよ。』娘は自分の出した絹手巾へ、見るから甘い蜜の滴りそうな、大きいのばかりを選んで沢山入れてくれると、爺さんはもう白百合を四五本鉢で切って、手に持ち添えていた。

傾き易い新月は早や向うの柳の梢に掛りかけているので、自分は残惜しいながら、そのまま急いで家へ帰る事にしたのである。

爺さんの白い百合の花と娘の赤い苺の実とは、いつも淋しい吾が晚餐の卓子を、今宵はどれほど美しく飾ってくれたであろう。

自分は紅燈緑酒に賑わされたホテルや宴席の卓子に付いたより、どれほど味よく心嬉しく椅子に付いたか知れなかつたのである。

口ぶえでも吹きたくなる初夏の夕ぐれ。

みんな梅雨がおわって、さわやかに衣がえしている。ひらひらと風をまとう白い浴衣すがたが目だつ。

荷風にかぎりなく近い分身「自分」も、すつきりした白い装い。夏帽子に浴衣をきてステッキをたずさえ、ふわりと美しい夕ぐれをさまよう。

自然のすべてが透きとおる。久しぶりの晴れた夕空、ちいさな水流、むらさきの名もない草花、水のほとりの柳。すべてがブルー、ブルー、グリーン、シャーベットブルー、ミントグリーン。荷風の大好きな色ばかりだ。

これを書いたときの荷風は二十二歳。まだ作家とはいえない。宙ぶらりんの若者だった。自分のゆく道をさがしては挫折する良家のお坊ちゃんだった。

父のぞむエリート校、第一高等学校の試験には落ちた。それをいいことに神田の外国語学校で中国語をまなんだ。作家の広津柳浪にあらがれて弟子入りした。とともに落語家にも弟子入りした。狂言作者をめざして歌舞伎座へも出入りした。

おいおい、芯がぶれていよ、いい気なものだ。志をたてて一つの道をまっすぐ進め、と父親ならずとも言いたくなる。

しかし、人に気がねせず自らのところに正直に、たつぷり文化的な寄り道をしたことが、のちの作家・永井荷風のゆたかな栄養になっていたのだなと思わせる、珠のようにかがやく透明な小品が仕上がった。

「自分は何か美しいものを眼にしたいと思うて、」——みごとな出だしである。可憐にして衝撃的である。

ぶらぶら歩き、つまり散歩は国木田独歩が「武蔵野」でその効用をとなえて以来、明治の青年の思索のスタイルとなった。考えを深めるために林野を歩く。風に吹かれ、木々を見上げて孤独な空間を結晶する。

しかしこの可憐な小説の歩行はそれとはずいぶん異なる。荷風の分身「自分」は、思索し哲学することには興味がない。「美しいもの」を見たい、ただその欲望にしたがい歩き出した。軽やかでうきうきと楽し気だ。どうも明治小説の青年主人公にありがちの、悲恋失恋のなやみも彼にはない

らし。

重くない。大きくない。悲壮ではない。こんな楽しい軽量な出だしは、いかに短篇とはいえ、当時の小説としては珍しい。

小川にかかる板橋をわたるとちいさな水流があつて、よそから水の落ちる関があつて、そこから誰かまごつて遊んだのか、笹の葉の舟が流れてきて。

荷風の好きな綺麗なものばかり。おだやかな水流、若緑したたる木、花びら、たそがれの星の光。そしてそこに劇的に、ぱつと鮮やかな真紅が点じられる。真紅を求めて「自分」は水流をさかのぼる。まさに荷風の原点をなす詩が息づく。

だいじょうぶ、お父さんに叱られてばかりいたフラフラ屋の二十二歳の荷風。彼のなかではもうしっかりと、人生をつらぬく詩心が起動している。

後半はブルーとグリーンの涼やかな色彩世界から、鮮明な赤と白の世界にきっぱりと転換する。歩くうちに日は暮れ、月のあわい光がただよう。「自分」は、老人と少女がまもる秘密の花園にたどりつく。それは、真紅のいちごと純白のゆりを育てる畑。「自分」は少女に乞うて、草いちごを分けてもらう。かわいい手でハンケチにつつんでもらう。

たったそれだけのお話。だからいい。長い雨の季節がおわつて、雨に洗い流された世界がもつとも新鮮にかがやく一年のなかでも飛び切りの時間を、荷風は俊敏なテニス選手のように鋭くすばやくとらえる。

ちなみに、いちごの実はわたしたちが思うより、荷風の青春時代においては華やかでハイカラな

素材である。西洋の匂いがする。

とうじ荷風が愛読していたフランスの自然主義の大御所、エミール・ゾラの小説『女優ナナ』にも出てくる。娼婦のナナが唯一、もとの自分にもどれるのが、いなかの別荘。そのいちご畑に赤い実が豊かになっていっているのを見つけたナナは大喜びして少女のように、いちご摘みに夢中になる。ちなみに一九〇三年、荷風はナナの物語を『女優ナナ』として抄訳し、出版した。

やはり荷風の愛する泉鏡花も、物語に高貴な女性のたずさえる真紅のいちごをめぐってのドラマを描くの好む。もちろんそうした先輩たちのいちご物語も、荷風はおおいに意識しているはずである。